２０２４年度　群馬大学共同教育学部
学校推薦型選抜・帰国生選抜問題

特別支援教育専攻

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで，この問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題用紙は表紙を含め 4 枚，解答用紙は 2 枚，下書用紙は 2 枚です。
   落丁，乱丁，印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
3. 受験番号と氏名は全ての解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題用紙と下書用紙は持ち帰ってください。

問１　次の文章を読んで、以下の問に答えなさい。

教育界や一般社会でもですが、**「教える」と「学ぶ」の区別とそれらの関係が未整理**なのではないかと感じることが結構あります。「教えたのにちっともわかっていない」とか、「自分で課題を見つけて探究させれば、興味に応じて自主的に学習すると思って自由に選択させたのに、意欲的に活動しない」といった発言をよく耳にします。こういう発言に悪気はないのでしょうが、どうもどこかがおかしいように思います。

学習主体と教えている人物は別の存在です。学習主体の外にいる人物が教えるという行動をしたのですが、意図した学習を学習主体がしていないと言っているわけです。行為の主体が別なのですから、「教える」=「学ぶ」という関係が、成立しないのは当然なのではないかと思います。それなのに「教えた」のに「学んでいない」と言ってるわけです。こういう考え方をすると、必ず学習者サイドに問題があるということになります。どう考えればいいのでしょうか。

「学習はある特性を持った主体がある状況に置かれた時に生じる特定のものである」という見方をするようになって、「教える」ということと「学ぶ」ということについても多少理解が進んだように思います。当たり前ですが学習主体が学習するのであって、外側にいる人間がその学習に直接タッチするわけにはいきません。それでは為す術がないと思われるかもしれませんが、**外側にいる人間は学習主体の置かれている状況設定に関与することによって、学習主体の学習に影響を及ぼすことができる**のです。

学習者の学習の種類というか、学習の仕方に他者が影響を与えることは可能です。あまり良い例ではないのですが、実験結果がハッキリしているので挙げることにします。

実験はこういうものです。学生に後で行うテストの形式を告知します。半分には再生テスト（選択肢がなく自分で記述するテスト）を行うと、半分には再認テスト（選択肢を選ぶテスト）を行うと、告知します。そして再生テストを行うと告知したグループの半分には、告知通り再生テストを行い、半分には告知したのとは異なる再認テストを行いました。再認テストを行うと告知したグループにも同様のことを行います。

その結果は明瞭で、告知された形式のテストを受けた学生は成績が良く、告知された形式と異なるテストを受けた学生は成績が悪いというものでした。告知されたテスト形式によって彼らの学習の様式が変化したであろうと容易に想像がつきます。

（中略）

このように、学習者たちにして欲しい学習のやり方に、外側から影響を与える

ことは可能です。しかし、学習者は学習者なりの経験や姿勢を持っているわけで、それを通じてしか外からのものは受け取りません。したがって、影響を与えられると言っても学習者を直接コントロールできるわけではありません。

出典：知ってるつもり 「問題発見力」を高める「知識システム」の作り方，
西林克彦，2021，pp. 193-195.
＊ 出題にあたり、表記の一部を改めた。

（1） 下線部に示された学習の様式の変化について、どのように変化したと考えられますか。200 字以内で具体的に説明してください。

（2） 学習者の学習を深め、広げるために外側にいる人（教員）ができることは何だと思いますか。あなたの考えを 400 字以内で述べてください。

問２　次の文章は、ある全盲の学生（石田さん）が大学で修学するなかで感じた疑問について述べたものです。この文章を読んだうえで、石田さんはなぜ「謎かけのような問い」を投げかけるのか、そして、「バリアをなくす」とはどのようなことか、あなたの考えを600字以内で述べてください。

石田さんは、ときどき謎かけのような問いを投げかけてきます。「先生、大学がバリアフリーのために色々なところを点字化しようとしているんですけど、どう思いますか」。ある日、石田さんが研究室に来て問いかけてきました。「う～ん。石田さんはどう思うの」。返事に詰まった私に石田さんが言いました。「点字化するということは、障害者に対して、もうすべてバリアフリーにしたから、あとは一人で何とかして、と言っているようなものです。私は、たまに人にぶつかって、謝りながら道を聞いたりすることによって、私たちの存在をふつうの人にも知ってもらう、そして私もそうやってふつうの人と関わることが大切だと思います」

出典：〈できること〉の見つけ方—全盲女子大生が手に入れた大切なもの，石田由香理・西村幹子，2014年，p. ix